

## はじめに

ここに、平成13年度に実施した教育評価に対する評価報告書を提出いたします。

この評価報告書は、各学部、各研究科、各附属病院、そして教養教育に対して行った教育評価の結果を記したものであり、全5章からなっています。第1章「対象組織の現況」、第2章「教育目的及び目標」、第3章「項目別評価結果」、第4章「総合的評価結果」及び第5章「評価結果の概要」となっています。

報告書の中心をなす第3章の項目別評価は6項目からなり、各項目には各被評価組織が設定した原則として5つ以上の観点があり、その観点に沿って評価を実施し、それらを総合して項目の水準を10段階で評価して記してあります。各項目には、評価される「特色ある取組み」、「特に優れた点」等を抽出して記し、他方では「改善を要する点」、「問題点」等も記してあります。

評価は、各被評価組織が設定した目的及び目標に沿って実施し、目的及び目標自身については評価していません。目的と目標自体の評価を回避したことが果たして妥当だったかどうかは、私どもとは別の機関、あるいは社会ないし国民自身の判断を仰ぐことになるかと考えます。近年、「アカウンタビリティ」の問題が登場し、例えば、国立大学も社会の意向を反映した業務活動が必要との意見も多くあります。実際、本委員会も大学関係以外の有識者に加わっていただき、議論を重ねました。

さて、各被評価組織が設定している目的及び目標の高さは必ずしも一定ではなく、国際的貢献まで視野に入れたものから、地域との関係を重視したものまで様々であります。したがって、ある組織に対して示された評価の結果である数字が高いからと言って、そのままその教育が充実しているとは判断できない点に注意を要します。高い目的及び目標を掲げて教育を行っている組織では多くの努力と時間と費用が必要であり、未だその成果が現れていない場合があります。一方では、中程度の目的及び目標を掲げている学部等では多大な努力を払わなくとも目的及び目標に適った成果が得られている場合があるからです。この点は、特に注意して読んでいただきたいと思います。評価委員会においても慎重に議論を重ねました。評価方法と結果については批判を仰ぎたいと思います。

以上の点に十分配慮し、大学内はもとより社会においても、いたずらに数字のみが一人歩きするような取り扱いは絶対に避けるべきであります。特に、社会からは大学は見えにくいと言われており、この報告書の数字のみが安易に受け入れられる可能性がある事を憂慮します。むしろ社会では、それぞれの立場から大学に対しての要望や期待を表明されると共に、それらに適った目的及び目標が設定されているかを検討され、第3章の各項目毎に記されている「特色ある取組」、「特に優れた点」、「改善を要する点」、「問題点」等の記述と比較され、各組織の評価をご自身で行っていただくことを希望します。

本評価報告書が新潟大学の教育についての認識を深め、良い点はさらに伸ばし改善すべき点は改善し、また学外からの意見に耳を傾け、大学教育の質の向上に役立つことを強く願っています。

平成14年4月

新潟大学評価委員会委員長 齊藤 義明